

みちづくし in 佐世保 2019 実施報告

～7年に1度のチャンス・道守のとりにくみ～

古賀 克久¹ 雪丸 剛²

¹九州地方整備局 長崎河川国道事務所 調査第二課 専門官(〒851-0121 長崎県長崎市宿町 316 番地 1)

²九州地方整備局 長崎河川国道事務所 調査第二課 課長(〒851-0121 長崎県長崎市宿町 316 番地 1)

令和元年10月25日から26日の2日間にかけて佐世保市において開催された、九州の道守さんが一堂に会する「道守九州会議交流会」通称「みちづくし」について実施報告を行い、大規模イベントの運営・舞台裏を紹介することで、今後のイベント運営の一助となること、また、長崎県の特徴ある道守活動を紹介し、道守さんが道路管理等の大きな力となっていることを多くの職員に認識してもらうことを目的とする。

イベント運営、道路環境保全、地域活性化、ボランティア活動

1. 道守とは

「道」を舞台に、あるいは「道」をテーマに様々な活動を行っている人々を「道守」と名付け、道守が行う活動を「道守活動」と呼ぶ。具体的な活動としては、道路の清掃・美化、空き缶やゴミの回収、草花や樹木の育成・手入れ、道路の調査、道の歴史や文化の発掘・継承・活用など。道に関わる活動は全て「道守活動」と言える。

2. 道守の組織

道守九州会議をトップに各県に道守〇〇（県名）会議という組織があり、各県の道守会議が県内の道守さんを支援している。長崎の場合は、道守長崎会議が県内6地区に世話人というリーダーを配置し、地区毎に相談を受けたり一緒に活動を行うなど支援を行っている。

3. 道守長崎会議

道守長崎会議では、総会や地区交流会の開催、道守長崎通信の発行などの「他地区の活動を知る機会」や「横の繋がり」を意識した取り組みを積極的に行い、各地の道守さんのモチベーションを維持している。

長崎県内の道守さんの中で、特に活気あふれる活動を行っている団体について以下に紹介する。

(1) 小浜温泉57

国道57号沿いの小浜温泉街を中心に活動されている「小浜温泉57」の方々は「ジャカランダで小浜を元氣

にしたい」という思いで、ジャカランダ通りを中心に、清掃やジャカランダの手入れ（剪定や寒冷対策など）や、近隣小学校の卒業シーズンにジャカランダの記念植樹を行っている。ジャカランダとは亜熱帯性の植物だが、約50年前のエチオピアの政府顧問を務めた地元出身者の縁で種が小浜に送られてきたことがきっかけで植樹を開始。小浜温泉の地熱と小浜温泉57の方々が実施している寒さ対策により、6月には小浜温泉街にジャカランダが咲き誇り、ジャカランダフェスタが開催される等地域の賑わいに貢献している。



写真-1 ジャカランダ通りの清掃活動



写真-2 ジャカランダを鑑賞する観光客

また、道路協力団体にも指定され、植栽帯でジャカラ
 ンダの苗を販売し収益を得て道路環境美化に充当する
 という活動も行っており、安定した予算により活動範囲を
 拡大するなど、新しい施策を活用し積極的に活動してい
 る。

(2) 環境美化を考える会

道守長崎会議では直轄国道だけでなく長崎県全体の道
 守さんを支援しており「環境美化を考える会」の方々は
 西海市の大島（平成11年に大島大橋が供用し陸続きと
 なった地域）を中心に活動している団体。「大島大橋が
 できたことで道路のありがたみを感じた。何でも行政に
 頼るのではなく、自分達を使う道路は自分たちで綺麗に
 しなければ。」というのは代表の言葉であるが、皆さん
 自分事として道路の清掃活動等を実施されている。月1
 回の定例清掃以外に行っているのが、食育についての活
 動。地域の子供達と一緒に「除草した草」と「家庭か
 ら出る野菜くずなどの生ゴミ」で有機肥料を作り、それ
 を使って無農薬野菜を育て、最後は食べる。このように
 除草した草から食育の活動に繋げている。

また、西海市において年に1回行われるビッグイベ
 ント「長崎西海トライアスロン祭」では競技前のコース清
 掃や競技後の食事提供など全面的なバックアップの他、
 地域のために様々な活動をしている。



写真3 除草した草と野菜くずで有機肥料を作成



写真4 有機栽培で育った野菜で料理



写真5 食事会の料理の準備の様子



写真6 競技後の食事会の様子

(3) 潮見小学校区町内連絡会

後述する「みちづくし」にて発表を行った、潮見小学
 校区町内連絡会と潮見小学校が協力した活動について紹
 介する。佐世保市の潮見小学校区では国道35号の植栽
 帯において春、秋に花植活動が行われているが、その方
 法が特徴的である。まず小学生が花の種から苗を育て、
 植える前の植栽帯の草取りや土作りを小学生と連絡会が
 一緒に行い、植えた後の花の水やり、草取り、歩道の清
 掃活動を連絡会で行うという役割分担で連携して実施し
 ており、特に軽視されがちな植えた後の管理について連
 絡会で担当していただいている事が道路管理上助けとな
 っている。また、この潮見小学校と連絡会が連携した活
 動は、平成17年にこの地区の歩道が整備されてから現
 在まで続いており、潮見小学校の生徒が花を育てて植栽
 帯に植えて育てるという行為をすることにより、道路を
 綺麗に使おうという道路愛護の精神が育っていると考
 えられる。



写真7 潮見小学校と連絡会の花植えの様子

4. 道守九州会議交流会「みちづくし」

道守九州会議交流会、通称「みちづくし」とは、道守活動を行っている九州7県の道守会員が一同に会し、情報交換を通じて相互交流を行い、道への関心や愛護の心を育み、道を守り育てる活動の普及を促す目的で開催されている。九州全体の交流の機会として2004年から年1回九州各県で開催しており、今回で16回目。長崎県での開催は3回目となり、過去2回は長崎市で開催していたので、今回は佐世保市において令和元年10月25、26日に開催された。今年はコロナの影響で開催が危ぶまれているが、例年台風シーズンが終わるころに開催される。今回の参加者は約400名。協力してくれた長崎県や佐世保市の職員、地元の建設業関係者、地元の大学生のスタッフを含めると500名オーバーの規模となった。構成は、1日目の交流会、交流集会（懇親会）及び2日目の現地体験学習で構成される。

以下は、みちづくしの準備が始まる約1年前から開催までの運営・舞台裏、発生した課題に対してどう対応したかを時系列に沿って紹介する。



写真-8 みちづくしの開会の様子

(1) 初期（開催1年前～半年前）

まずは「場所」と「予算」そして「体制」の確保が必要。「場所」については、交流会と交流集会の2つの会場を確保でき、交通の便が良いところが条件。佐世保市に相談し、唯一条件に合うアルカス SASEBO を実行委員会が始まる前から確保した。この規模の会場は1年前でも予約がかなり埋まっているので注意が必要。

「予算」については、まず過去の実績を確認し予算概要を作成。当初の目安は300万円と設定。道守九州会議からの補助と道守長崎会議が計画的に積み立てていた予算を充当。また、助成金として、この様な大規模なイベントで申請する「コンベンション開催助成金」以外にも、実行委員のT氏が見つけた親和銀行が実施している長崎県内の地域文化の発展・向上・振興に寄与することを目的とした「親和銀行のふるさと振興基金」の助成金

を申請。そして更に足りない分は企業より協賛金を募ることとなった。

「道守長崎会議」実行委に助成金



親和銀ふるさと振興基金

援や地域活性の活動に取り組んでいる。九州各県の道守会議は情報共有を目的に、毎年交流会を開いている。本年度は10月25、26日に「みちづくしin佐世保2019」として佐世保市で開催される。実行委は懇親会、現地体験学習などを企画している。贈呈式は島崎町の同行本店別館であり、大庭真一取締役専務執行役員が牧実行委員長に目録などを手渡した。牧実行委員長は「佐世保の魅力発信できるよう、助成金を活用して成功させたいと話した(堀内優子)」

写真-9 贈呈式の新聞記事

(長崎新聞令和元年8月29日付朝刊)

「体制」については、上述した企業協賛金の担当として長崎県北地域の建設業に精通した道守長崎会議の企業世話人に協力を仰ぎ、また、宿泊場所の確保や2日目の現地体験学習の企画のためコンベンション協会にも協力を求め、交流集会のケータリングやアトラクションの手配のため地元で精通した人材を巻き込むなど必要な人材を適宜追加していき、課題が発生する度に実行委員会の体制を強化し対応した。

この時期は、場所を確保して、予算の目処をたてて、必要な体制を作っていくという、土台作りの期間となる。

(2) 中期（開催半年前～2ヶ月前）

半年前くらいから交流会、交流集会、現地体験学習の内容を具体化していくこととなり、それに伴って問題も発生していく。

交流会は①基調講演、②佐世保市における活動事例紹介③パブリックミーティングという3部構成に決定した。パブリックミーティングについては、よくあるパネルディスカッションで登壇者が発言するだけではなく、会場全体を巻き込んだ議論をしたいというこだわりがあり、「パブリックミーティングをどのように実施すれば会場一体となった議論ができるか？」という課題があった。この課題を解決したのが実行委員S氏のアイデアであった。会場からの発言者を撮影しステージ上のスクリーンにリアルタイムに投影することで、会場からの発言もステージ上で話しているイメージとなり、登壇者と会場の境界をなくし会場一体となった議論が行われることとな

る。(写真-10) 良いアイデアだったが「これを実施するための機材や運営等をどうするか?」という問題が残っていた。これを解決したのが佐世保市からの紹介で繋がった、地元長崎国際大学尾場准教授の「尾場ゼミ」である。尾場ゼミはイベント企画・運営や撮影が得意としており、尾場准教授の「この様なイベントを是非ゼミ生にも経験させたい」という意向もあり、協力をお願いすることとなった。高価な機材を使っただけの実施となったが、映像技術料としては通常では考えられない低価格での支援となった。この舞台装置を準備した結果として、パブリックミーティングでは、会場からの発言が積極的に行われ中央スクリーンに映し出す事によって、会場一体となった議論が行われ、時間を大幅にオーバーしてしまうほど活発な議論が行われることとなった。



写真-10 パブリックミーティングの様子
(写真左下の発言者を舞台上のゼミ生が撮影し、中央のスクリーンに投影)

また、交流会は長丁場となるので休憩を挟むが、その休憩時に湯茶接待を行う。その時に提供のお菓子について、佐世保で有名な九十九島せんぺいを準備したが、実行委員S氏のアイデアでそれに一工夫を加える事となった。通常、せんぺいに「九十九」と文字が入っているが、その文字を変更できるということだったので「みちづくし」と入れ、みちづくし仕様の九十九島せんぺいを提供する事となった。当日は、お茶は佐世保市の世知原茶、お菓子は「みちづくし」入りのレアな九十九島せんぺいで、佐世保らしさをアピールすることができた。なお、湯茶接待をはじめ会場案内のスタッフについても、長崎国際大学の学生にボランティアで対応いただいた。



写真-11 みちづくし仕様の九十九島せんぺい



写真-12 休憩中（湯茶接待の様子）

一方、交流集会についても、ケータリング（料理、飲み物）をホテルに頼むと予算オーバーするという課題が発生していた。この課題を解決するために道守さんの繋がりで紹介があった、元セントラルホテル社長のT氏。自ら采配人となり地元飲食店にお願いして佐世保名物を集めるという方法で交流集会を準備していただき、佐世保の名物を集めたオードブル、佐世保バーガー、海軍さんのビーフシチュー、玉屋のサンドイッチなど、ホテルに依頼するより佐世保らしさが満載で、開催後の聞き取りでも参加者の皆さんに大好評の交流集会だったことがわかった。



写真-13 交流集会の様子

2日目の現地体験学習については、佐世保市観光コンベンション協会の全面バックアップにより、佐世保らしさを感じられるコースを設定することとなった。実行委員会でコースの検討を重ね最終的に2コースを実施、2コースとも十分佐世保らしさ、佐世保ならではの感じるコースとなった。

コース①「海軍さんの港コース」では、海上自衛隊資料館や海上自衛隊佐世保地方総監部へ。普段は一般の立ち入りできない地下壕の「防空指揮所」跡の見学もでき、SASEBO 軍港クルーズでは、海上自衛隊や米海軍の艦艇を海から眺め、軍港の街佐世保を感じる事ができた。

コース②「日本遺産めぐりコース」では、平成28年

に認定された日本遺産をめぐるコース。太平洋戦争開戦の暗号「ニイタカヤマノボレ1208」を送信したとも言われる「針尾無線塔」や建設当時は東洋一の吊り橋「西海橋」、戦時中の学校の先生や生徒の手で、爆薬を使わずにつるはし等で手掘りした防空壕「無窮洞」をめぐる、佐世保の歴史を学んだ。



写真-14 地下壕「防空指揮所」跡



写真-15 針尾無線塔

以上のように、開催内容が具体的になり、プログラムが固まり、案内チラシを作成し、参加者募集という流れになる。チラシのデザインについては、佐世保市でデザイン事務所を経営する実行委員K氏が活躍。「自分が実行委員に入っているので恥ずかしいものはできない」と責



写真-16 案内チラシ

任感を持って担当され、低価格で質の良いものを作成できた。デザインには、ながさきサンセットロードのフォトコンテストの写真を活用し、佐世保の夜景を使ったチラシが完成した。

また、交流集会のオープニングアトラクションに実施したジャズバンドの演奏も「佐世保らしいアトラクションはジャズバンドだろう」ということで実行委員K氏より「佐世保ジャズスタディビッグバンド」へ依頼。これも実行委員K氏のコネクションにより格安で対応していただいた。



写真-17 交流集会でのジャズバンド演奏の様子

(3) 終盤（開催2ヶ月前～1ヶ月前）

2ヶ月前くらいになると参加人数などの確定事項が増えていくため、具体的な人員配置や必要な物の数なども確定し、大枠で考えていた事が詳細に固まっていき急速に進んでいく。

ハード的な準備としては、会場の看板、当日配布用のリーフレットや紙袋等があるが、これも実行委員K氏によるデザインによりセンス良く仕上げていただき、準備が進んでいった。また、会場レイアウトの調整や当日の進行について登壇者や発言者との調整が進んでいく。裏方としてはこの準備期間が勝負所と言える。



写真-18 当日配布用リーフレットと紙袋

(4) 直前（開催1ヶ月前～）

直前の1ヶ月間は確認確認の日々となる。場面転換時のレイアウト変更、スタッフの動き、当日使用する備品

の確認などの細々な確認作業の期間となる。MCとの打合せや登壇者との最終調整もこの時期に確定させておかなければならない。

また、前日から会場を確保し準備できることは終わらせておくことが必要。この会場借り上げ費用は必要経費として考えておく必要がある。

5. 開催当日

開催当日は必ず想定外の事が起きる。次々と発生する課題に一人では対応するのは無理なので、班長の対応に任せてしまう体制をとっておくことが必要。基本的に班長が責任持って担当範囲を統括してもらう。

また、進行については休憩時間に余裕を持たせ、進行が押してきたら調整できるようにする等、進行が押した場合の事を考えておく必要がある。



写真-12 舞台転換班の最終確認の様子



写真-12 受付班の準備状況

5. まとめ

みちづくしを終えて感じた事は3つ。ひとつめは「イベント開催は段取り八分以上と+α」。よく仕事は段取り八分と言うが、イベント開催については、ほぼ段取り次第だと感じた。そして+αとしては、当日発生するアクシデント対応のため、総括者にフリーマンをつけておくと対応しやすいであろうと感じた。当日の進行にも何

らかアクシデントが起きることを踏まえ、余裕を持った進行が必要。今回は内容を詰め込みすぎたところが反省点。

ふたつめに「任せる勇気が必要」。思い切って班長に任せてしまう事が必要だと感じた。今回の場合は周りのスタッフがイベントに慣れている道守さんや信頼できる上司、優秀な自治体の方ばかりで安心して任せる事ができたのが、みちづくしが成功した一つの要因だと思われる。それぞれの班を自立させ、そのそれぞれの班を当日の進行に繋ぐ役割を意識することで、当日の進行管理に集中することができた。

最後にみちづくしが成功した最大の要因が「道守さんのネットワーク」である。元々実行委員の中心であった道守さん自身も経験豊富で頼もしかったが、課題が発生した時の対応に道守さんの幅広いネットワークが功を奏した。このネットワークのおかげで今回のみちづくしは、非常に充実した内容を遙かに低予算で実現する事ができたと言える。



写真-12 交流会終了後の記念撮影

6. 今後へ生かすために

7年に1回各県にまわってくる「みちづくし」を経験できたことは非常に貴重な事と感じ、これを今後へ生かしていきたいと考えている。

まずは、今回のみちづくしを経て感じた、道守さんとの繋がりを大事にしていくことがとても重要だと感じた。自分たちにはないアイデアや他分野に渡るネットワークを持つ非常に貴重な存在がすぐ側にいらっしゃることは、道路行政の財産である。

そして、今後はその道守さんの繋がりを生かした「民間の力」をもっと引き出して、道守や風景街道のような取り組みで道路環境保全や地域活性化を促進できればと考えている。特に日本風景街道については予算をどう確保するかが課題となっており、長崎の2つのルートでは民営化を進めていく方針である。課題は山積みとなっているが、道守さんのネットワークによる民間の力やアイデアを引き出しながら解決し、道路環境保全や地域活性化をより一層促進していきたい。